

書評

中溝和弥『インド 暴力と民主主義—一党優位支配の崩壊とアイデンティティの政治』（東京：東京大学出版会、2012年、359頁、8,200円＋税、ISBN978-4-13-036242-9）

（評）小嶋 常喜*

1. はじめに

まず本書が第24回アジア・太平洋賞特別賞を受賞したことについて、中溝氏に心からの祝意と長年にわたる努力に敬意を表したい。本書評では、評者の専門である植民地期以降の北インドおよびビハール農村社会の歴史研究からみた本書の価値と疑問点についてそれぞれ指摘したい。

2. ビハール農村社会史研究からみた本書の価値

植民地期以降のビハール農村社会とその変容

植民地期以降のビハール農村社会では、上位カーストの村落エリートを頂点とする保守的ないし「半封建的」な社会や権力構造が存続していたとされる。その理由として、植民地政府が既存の社会構造をできるだけ変えずに大地主や村落エリートの影響力を利用した「限定的支配」を行ったこと [Yang 1989]、会議派の組織・民族運動・農民運動においても彼らが指導的役割を果たしたこと [Hauser 1961; Henningham 1982]、さらに彼らが都市の政治家と農村のパイプ役となったこと [Pouchpadass 1974] が指摘されてきた。

1970年代後半になるとヤーダヴを中心とする上層後進カーストや彼らを支持基盤とするアイデンティティ政党の台頭がはじまり、これをこの時期にビハールにも及んできた「緑の革命」と結びつけて「社会経済変容」として説明する議論が増えた [Prasad 1975; 1980; Blair 1980]。しかしそれらは、独立後のビハール農村社会で会議派がいかに権力を維持しそれがなぜ立ちゆかなくなったのか、そして会議派に代わってアイデンティティ政党が台頭できた社会構造について明らかにしてこなかった。本書はこれらの問題について、諸政党の動員戦略や暴動への対処法などの点から、地道な現地調査に基づいて実証したことに最大の功績がある。

本書によれば、独立から1960年代までのビハール農村社会では社会的・経済的影響力を持つ有力地主カーストに依存した「地主動員戦略」が機能してきた。これにより会議派は集票に成功し、議会で多数を維持した。しかし次第に社会主義政党が「カースト動員戦略」を採用して地主動員戦略

* 法政大学第二中・高等学校教諭（南アジア近現代史）

・ 2008、「植民地期インドにおける「農民」の登場—ビハール州キサーン・サバーの系譜」、『南アジア研究』、第20号、118-139頁。

・ 2012、「世界史教育のための南アジア史—学習指導要領の『歴史的思考力』を問う」、『教育研究』、第47号、21-40頁。

を動揺させることになる。カースト動員戦略とは、これまで有力地主カーストが各村で垂直的に動員してきた後進カースト小作人・指定カースト農業労働者の票を水平に切り取るものである。これに危機を感じた会議派は、1980年代に「亜流宗教動員戦略」を採る。これはヒンドゥー教徒の保護を黙示的に訴える宗教的アイデンティティに基づくものだった。結果としてビハールではバーガルブル暴動が起き、その対処に失敗した会議派は急速に支持を失った。

この亜流宗教動員戦略はアイデンティティ・ポリティックスやアイデンティティ政党の台頭をもたらし、留保制度をめぐるマンダル暴動やアヨーディヤー問題をめぐる宗教暴動が発生する。1990年に発足したジャナター・ダルを中心とするララー政権はマンダル暴動には曖昧な対処、宗教暴動には徹底的に抑え込むという対処によって、BJPの「宗教動員戦略」を退けてヤーダヴとムスリムの支持を固めた。現在のビハール州政治が一党優位制ではなく競合的多党制となっているのは、近年政権を担っているRJDやJD(U)も含めて、いずれもカースト動員戦略を採用するからだと著者はいう。

こうした独立後の政治変動が村落レベルで進行した事例として、本書はB・P・マンダルの出身地であるマデプラ県ムルホ村の「下剋上」を紹介する。同村では村落エリートであるマンダル家の地主動員戦略が次第に機能不全に陥り、連邦下院、州議会、そしてバンチャーヤットの村長職までも失った。

カーストの変化・新しい意味

これまで歴史研究が明らかにしてきたのは、植民地期にカーストが主にブラフマニカルな価値観やそれに基づくヒエラルキーの中で意識されるようになったことだ。植民地期ビハールのプーミハールやヤーダヴによるカースト運動も、そうしたカースト意識に基づく地位上昇を志向し、サンスクリタイゼーションの実践や上位ヴァルナへの帰属を主張した。

いっぽう著者が有権者への聞き取りで明らかにしたことは、独立後の政治変動の中で投票の対象が人から党へ変化したこと、そして諸政党のカースト動員戦略やマンダル委員会報告の実施によってカーストが投票行動の基準として重要になったことだ。またマンダル家のような裕福なヤーダヴや「封建的」ヤーダヴは、同じカーストではなく上位カーストのように認識されているという。つまり植民地期に宗教的・社会的に意識されていたカーストが、現在では特定のアイデンティティ政党を支持するという政治的立場として強調されているのである。近年、諸カースト集団の政治的結集を対象とする政治分析が極めて多いが、独立後のカースト集団やカースト意識の変化については十分に議論されていない。植民地期のそれとは異なる、政治的立場としてのカーストが現代のビハールに立ち現われてきたことを明らかにした本書は、その意味でも示唆に富む。

カースト・宗教両アイデンティティの「相互作用」について

著者によれば、インド政治研究ではカースト・アイデンティティに基づく政治運動と宗教アイデンティティに基づく政治運動は別個に検討される傾向が強く、両者の「相互作用」が顧みられるこ

とはなかった(27頁)。これに対して本書は1990年のジャナター・ダルの政権樹立が、同党のカースト動員戦略だけによるものではなく、宗教アイデンティティの争点化とそれに伴う暴動とも、特に「暴動の対処法」という点で関係していることを指摘する。

この相互作用について、歴史研究ではこれまでかなり議論されてきた。例えば1893年と1917年はビハールを含めたヒンドゥスターン平原一体でバクル・イードをめぐって激しい宗教暴動が起きた年として知られる。この暴動の背景として、ヒンドゥー復古改革派や保守派による牝牛保護運動・シュッディー運動・サンガタン運動だけでなく、先述したカースト諸団体の地位上昇運動もブラフマニカルなイデオロギーを共有することから、宗教アイデンティティを強化したと指摘されてきた[Freitag 1980; Pandey 1990]。

しかし本書がいう相互作用とは両者が共鳴し合って増幅することだけでなく、一方のアイデンティティを抑圧し、もう一方を選択的に強化・利用することも含む。そしてこれを分析する際に筆者が目にしたのが暴動への対処法だった。「相互作用」という言葉に多少違和感があるが、これまでの多くの研究が暴動そのものしか分析してこなかったことは確かであり、本書は新たな視点を提示したといえる。またラール政権の暴動への対処の結果として、カースト・アイデンティティが強化されたにも関わらず宗教アイデンティティが増幅されない新しい現象が生まれていることも興味深い。

3. 若干の疑問点

ビハール農村社会の農民諸階層について

第二章では「地主」・「富農」・「中農」・「貧農」・「貧中農」といった農民諸階層のカテゴリーとカーストとの対応関係が説明される(57-58頁)。しかしその後は「地主」・「自小作」・「小作」・「農業労働者」というカテゴリーや「小農」・「零細農」なども使われ、全体としてどのような関係なのか不明である。

植民地期以来のビハールの半封建的社会構造において、村落レベルで一貫して重要な立場を維持してきたのは、上位カースト・後進カーストの土地保有諸階層である。彼らの中には法的には必ずしも土地の所有者ではなく、地代の一定額を取得できる「下級所有者」、「占有権」が保障されたライヤット、そして地税が免除された特権的小作人も含まれる。そしてその多くは、下級小作などに又貸しする事実上の地主だった。先述の地主動員戦略を行ったのは当然この「地主」層なのだろうが、この点の説明がもう少し欲しかった。

植民地期の小作立法、独立後の土地改革の評価をめぐって

第四章において、独立後のザミンダーリー制廃止法および諸々の小作保護法・農地所有上限設定法などの「制度アプローチ」は、欠陥が多く概ね失敗に終わったと結論付けられ(112-121頁)、上層後進カーストが経済的に台頭する要因としては「緑の革命」のみが検討されている。しかし、

植民地期の下級所有者や小作に対する法的保護によって、彼らが事実上の地主としてすでに一定の土地を保有していたことも考慮すべきではないだろうか。また「制度アプローチ」についても、例えばビハール州内のダルバンガー、デムラーオン、ハトゥワー、そしてベティアーなどの超巨大地主を解体したことは事実であり、一定の効果があったとはいえないだろうか。

4. おわりに

以上のように本書は、数点の疑問はあるものの、ビハール農村社会史研究の観点からも価値が高い。著者の今後の研究に期待し、1点だけ要望したい。

研究者の中には、上層後進カーストの政治的・経済的台頭によって、土地を持つドミナントなカーストが土地なし下層カーストや「不可触民」を抑圧する半封建的社会構造が強化されたという主張もある。農民運動の担い手が上位カーストの村落エリートや上層後進カーストの富裕小作から貧農や農業労働者に移っていることや、ビハールにおけるナクサライト運動の広がりもこの文脈で理解することができる [Das 1983; Louis 2002]。

一方で本書は「椅子問題」の叙述 (282-283 頁) にあるように、上層後進カーストの政治的台頭をビハール農村社会の構造的変化として好意的に扱っている印象を受ける。彼らの台頭は大きな社会構造の変化の中でのことなのか、それとも社会構造が大枠では維持された中でのことなのか、著者のこれまでのナクサライト研究 [中溝 2009] と合わせ、今後明らかにしてほしい。

参考文献

- 中溝和弥、2009、「暴力革命と議会政治—インドにおけるナクサライト運動の展開」、近藤則夫 (編) 『インド民主主義体制のゆくえ—挑戦と変容』、アジア経済研究所、355-401 頁。
- Blair, Harry Wallace, 1980, "Rising Kulaks and Backward Classes in Bihar-Social Change in the Late 1970's," *Economic and Political Weekly (EPW)*, 12 Jan., pp. 64-74.
- Das, Arvind N., 1983, *Agrarian Unrest and Socio-economic Change, 1900-1980*, Delhi: Manohar.
- Freitag, Sandria B., 1980, "Sacred Symbol as Mobilizing Ideology: The North Indian Search for a 'Hindu' Community," *Comparative Studies in Society and History*, 22-4, pp. 597-625.
- Hauser, Walter, 1961, "The Bihar Provincial Kisan Sabha, 1929-1942. A Study of an Indian Peasant Movement," University of Chicago Ph.D. thesis.
- Henningham, Stephen, 1982, *Peasant Movement in Colonial India, North Bihar 1917-1942*, Canberra: Australian National University.
- Louis, Prakash, 2002, *People Power: The Naxalite Movement in Central Bihar*, Delhi: Wordsmith.
- Pandey, Gyanendra, 1990, *The Construction of Communalism in Colonial North India*, Delhi: Oxford University Press.

- Prasad, Pradhan H. 1975, "Agrarian Unrest and Socio-Economic Change in Bihar: Three Case Studies," *EPW*, 14 June, pp. 931-937.
- , 1980, "Rising Middle Peasantry in North India," *EPW*, Annual Number, Feb., pp. 215-219.
- Poucheapadass, Jaques, 1974, "Local Leaders and the Intelligentsia in the Champaran Satyagraha," *Contributions to Indian Sociology*, No. 8, pp. 67-87.
- Yang, Anand, 1989, *The Limited Raj: Agrarian Relations in Colonial India, Saran District, 1791-1920*, Berkeley: University of California Press.